

思いやり深い人 大平先生

長谷川 隆太郎

今からおよそ十五年前、日本経済は高度成長華やかな時代でした。その時、私は三菱化成工業の副社長をしておりました。その華やかな高度成長のなかで、石油化学は利益なき繁栄産業といわれ、非常に競争が激しく将来業界で生き残るには原料であるナフサを如何に安く、かつ量的に安定確保するかということでした。そのため、アジア石油を買収し、その社長を私が兼務したわけです。当時アジア石油の工場は函館と横浜との二工場でしたが、高度成長の波に乗って第三工場を建設することになり、その立地が香川県坂出市番の州埋立地であったわけです。そこで、時の通産大臣でありたまたま香川県ご出身の大平さんに工場建設の許可をお願いにいったのが、私と先生の最初の出会いです。お願いにあがってから数日たって、当時の熊谷典文通産次官から私に呼び出しがかかって、次のようないかにも大平さんらしいエピソードを聞かされました。

ある日大平さんは、大臣室に呼び入れた熊谷次官に顔を向けず、後ろを向いたまま「熊谷君、私が陣笠議員だったら君のところへ毎日日参して頼むんだがね。実はアジア石油が第三の工場を私の選挙区の番の州に建てたい、といって頼みにきていることは、君も知っているだろう。私は通産大臣で当事者なので、君に頼むということも具合が悪いし……本当に弱っているんだよ」と、いかにも困ったようにトットツと話されたということ。この話を聞いて私は、非常に恐縮して、それから大平さんの魅力と人柄の良さに惹き込まれていきました。

その後、総選挙があった時に、工場が大平さんの選挙区なので、「私どもも全力をあげて応援したい」と申し出

たところ、「長谷川さん、私に全力をあげて応援していただくのは大変ありがたいが、坂出の地元からは加藤先生も出ているので、半分は加藤先生を応援するようにして下さいよ」というお話がありました。いかに大平先生に自信があるうとも、選挙は水モノ。自分の競争相手に半分応援してやってくれとは、なかなかいいえないうことで、私はびつくり仰天して、ますます大平さんの人物の大きさに感心し、一辺倒になっていったわけです。

それから、偶然拙宅が瀬田の太平邸の近くだったので、よくスリーハンドレッドや小金井CCに連れて行ってもらいましたが、大平さんのゴルフはスコアよりはプレイそのものを楽しむゴルフだったといえるでしょう。瀬田のお宅が火事で全焼した時、私が「何か不自由なものがあつたら……」と申し上げたら、「長谷川さん、ゴルフの道具も焼いてしまったのですよ」といわれたので、ゴルフ道具をプレゼントして大喜ばれたのが忘れられないこととなりました。しかし、あれほど好きだったゴルフも、総理大臣になられてからはなかなか思うようには行けず、ほんとうにつらそうだったのは今でもお気の毒に思います。

私は京都出なのですが、ある時山下英明さんから「長谷川さんは香川の人かと思っていましたよ」といわれたぐらいの熱狂的大平ファンだったのですが、それは大平さんの誰に対しても暖かみのある庶民性に加え、何事も筋を通す信念に、多血質の私が惹きつけられたからです。私などよりも、もっともつと親しかった人はたくさんおられたと思いますが、大平さんへの心服の度合いにかけては私は余人に負けないと信じています。

その思いを胸に秘めて、この十余年間、私は大平さんの迷惑にならないようにと心がけて、遠くから見つめてまいりました。今にして思えば、大平さんが佐藤内閣の頃、政治家としては不遇の時代に、早朝の散歩の途中拙宅に立ち寄られ、気さくに四方山話をされて帰っていかれた自由な時代が貴重で、そして懐しいものとして思い出されてまいります。

(アジア石油会長兼社長)